

# 如来蔵思想形成における一・二について

神 谷 正 義

## 一

一九五〇年、E・H・JohnstonとT・Chowdhry両教授によって究竟一乗宝性論（以下宝性論とする）の梵本 *Ratagotravibhāga mahāyānōtāratantra-Sūtra* が公刊されて以来、如来蔵思想研究がインド仏教研究の中に重要な位置を占めるようになったのである。如来蔵経典・論書の研究を中心として、理論的、思想的の研究・或いは、フィロロジカルな研究等が数多く発表されている<sup>①</sup>。それら如来蔵研究の基盤が宝性論に置かれていることは疑えない。しかし、こうした研究分野の隆盛に対して、如来蔵思想形成における文化史的背景のあとづけに関する研究は殆んどといってよい程発表されていないというのが現状である<sup>②</sup>。高崎直道博士の大著「如来蔵思想の形成」においては、その形成における諸概念と原典批判を通して、宝性論をベースとした思想体系が中心課題であって文化史的考察は博士自らの研究方法論と、その範囲からして、研究対象外といえるもので、こうしたことがらは今後の課題であるといえる。

一 思想の形成は、その思想の具体的発生から組織化されるまでにみられる理論体系、具体的発生時の思想背景とそれらの思想的淵源への考察、そして、それらを培ってきた文化史的側面への考察や他思想との交流への追求等が必要であると考えるのである。

こうした立場に立脚して、如来藏經典中で最古の經典である如来藏經を取り上げ、そこにおける問題を列挙し、次に、如来藏思想形成における光明の問題を、如来藏經と宝性論の用法から検討し、その上で浄土教思想（無量寿經）と如来藏思想（如来藏經）とを対比しようとするのが、この小論文の意図するところである。

## 二

如来藏思想形成の文化史的背景を考察せんとする時、それら如来藏經典の成立地を無視することはできない。成立地を考察する方法としては經典中にみられる地名や部派教団との関係、或いは、訳経僧の経歴等、さまざまなこととを総合的に検討しなければならない。

初めに經典中にみられる地名であるが、涅槃經には罽賓 Kāśmīra 魯楼麗（盧呵隸）・優禅尼国・首波羅国などの地名がみられ、央掘魔羅經には罽賓・婆楼伽車国 Bharukaccha、伽頻山国を、大薩遮尼乾子所説經に鬱闍延城を、そして大法鼓經には摩頭邏をあげている。

次に如来藏經典の訳経僧についてみるに、北インド出身者は、如来藏經の訳者、仏陀跋陀羅、大薩遮尼乾子所説經・法華經論・不増不減經・十卷楞伽經の訳者、菩提流支、興顕經・正法華經の訳者、法護はカシミール出身にして中インド・ヴィクラマーシーラ寺において出家している。又、中インドまで入竺した法頭は泥洹經を訳出している。中インド出身の訳者としては、無想經、大般涅槃經の訳者、曇無讖、勝鬘經をはじめ、大法鼓經、央掘摩羅經、四卷楞伽經など如来藏思想上、重要な經典を訳出し、法華經論・宝性論をも訳出している求那跋陀羅等がいる。西インド出身としては、ウッジャイニ出身とされる真諦があり、金光明經・決定藏論・撰大乘論釈・大乘起信論・十八空論や、無上依經、仏性論など数多くの経論の訳出をみることができる。

次に部派教団との関係を考察したい。如来蔵思想と心性本浄客塵煩惱説とは、その構造論の上から不離な関係というよりも同調異曲のものと考えられるものである。阿毘達磨論書には、この心性本浄説について、各々の部派の立場からして論争がくりひろげられている。その中で、舍利仏阿毘曇論卷二七仮心品には増支部經典の文を聖教量として心性本浄説を主張している。この舍利仏阿毘曇論の所属部派については学説を統一するまでには至っていないが、大勢としては法蔵部所属とする説が有力である。同じように心性本浄説を主張した部派として分別論者や大衆部系の大衆部、一説部・脱出世部・鷄胤部などがあげられ、又、如来蔵説の構造論上重要な煩惱の理解の上から先の部派以外に犢子部・化地部・案達羅派・北道派・正量部などの教学も注意されるものがあり、説一切有部・經量部をも無視することができない。<sup>⑥</sup>

次に、如来蔵思想の重要な概念である Gotra は家父長制社会を象徴するものであって、「家父長制社会の、田地 Kṣetra に対する種子 bīja 優位論—父から子へ相伝するものと解せられる」とあるように、如来蔵思想形成における上、Gotra が重要な位置を占める時期は、母系制社会はその經典成立地よりは除外されることになる。南方アンドラ王朝ドラヴィダ族はナーシクの碑文によれば母系制社会を構成していたようである。<sup>⑧</sup>

こうしたことがらを考慮に入れて如来蔵經の成立地等の問題点を考察したい。

如来蔵經の成立は訳經史等の立場からして三世紀中葉と考えられている。如来蔵經の思想的背景としては般若經をはじめ、華嚴經卷三五・宝王如來性起品をあげることができる。經典中にみられる地名としては、王舍城靈鷲山 (Rājagṛha-Gṛdhra-kūṭa) をあげているが、これは一種形式的なものであって、成立地を考察する上での手がかりとはならない。しかし、他の經典にはあまり見られないユニークな説示をみることができる。成道十年説や未成仏の四菩薩などの記述は他に多くみられない。四菩薩とは文殊師利・觀世音・大勢至・金剛慧の四人である。經典中

に出現する菩薩名は、その經典の思想・性格を表現する上で注意すべきであると考えらるならば、金剛慧菩薩が会衆の代表であることは意味が深い。般若の金剛の智慧 (vajra, jñāna, mati) で煩惱の殻を打破する特性を表わしている。<sup>⑬</sup>又、菩薩の中、舍利弗、大目犍連・羅呼羅・阿難陀や、觀世音・大勢至・日藏・虚空藏・弥勒・文殊師利菩薩はユニークな存在である。<sup>⑭</sup>大唐西域記のマトウーラ国<sup>⑮</sup>の条には、過去四仏の供養の他に仏弟子達の供養、自らの信ずるところに従って供養し、大乘を学ぶ者は諸菩薩を供養する旨を述べている。

次に、如来藏經の九喻中、金喻について考えたい。第四不淨処中真金喻、第七幣物中真金像喻、第九真金模像喻をみることができる。こうした譬喻は当時の社会經濟をよく反響しており、金の流通が盛んであったことを物語っているといえる。仏典中に金に言及するものは多く、ジャータカをはじめ阿含、ニカーヤには、生活の中における金や金鉱・精練技術・或いは金の輸入などについて触れている。カウティリヤ実利論<sup>⑯</sup>によれば鉱産物の原地販売を厳しく禁止しており、アショカ王<sup>⑰</sup>当時には金は經濟上重要な立場を持っていたと考えられる。又、クシャーナ朝<sup>⑱</sup>に入ると金貨本位制度がとられ、ウィマ・カドフィセス王の時とされる。碑文等によれば王侯の仏教々団への寄進もみられ、金喻は思想的には不変性を意味して心性本淨説と密接な関係をもつものである。

次に、第六喻にみられるターラ樹とアームラ樹について考察したい。ターラ樹 *Tala* はシュロ科に属する喬木であって、種々の細工の材料として用いられ、或いは、樹液を酒にしたり、砂糖を作ったり、種子・果実は食用として貴重なものであったようである。アームラ樹 *amra* は亜熱帯植物にして北方インドでは殆んど育成しないものである。大唐西域記には、マトウーラ国<sup>⑲</sup>の条の中で「菴沒羅果は家ごとに植えられていて林をなしている。」とあり、又、秣底補羅國の条の中に、世親と衆賢の故事にふれ、衆賢の死骸をアームラ林の中にある伽藍に安置したことを伝え、又、無垢友の故事の中にもアームラ樹について言及している。地域的にはヤムナー河流域によく育つ植物と

考えられる。こうしたことがらを総合的に考え合わす時、如来蔵經の成立地は中インド、マトウーラを中心としたヤムナー河流域ではないかとも考えられる。<sup>28)</sup>

### 三

次に如来蔵思想の形成における光明思想との関連を如来蔵經と宝性論の用例から考察したい。

光明とは一般に仏・菩薩が放つ光輝・智慧であって、真理を体得することによって生ずる智慧の姿であると考えられる。光明には智慧光・色光、或いは色光を常光と放光などと分類することもあるが、それらは全て悟りを体得することによって生ずる特性といえる。こうした光明の用例は初期の經典よりは大乗經典、特に華嚴系經典や浄土教經典において重要な位置を占めているのである。原始經典には光明が梵天出現の前兆とされたり、<sup>29)</sup> 或いは諸天が光明を放って世尊のところへ説法を聴聞しにくる情景などに用いられる。<sup>30)</sup> そして、それらの光明、或いは日月光の光明よりも仏の光明の超越していることをも説いている。<sup>31)</sup> 又、仏世尊が光明を放って十方を照すことなどについても大乗經典に多くみうけられ、勝鬘經に「世尊は勝なる光明を放って普く大衆を照し身は虚空に昇る」といい、如来莊嚴智慧光明入一切仏境界經の卷上に「我が身の千の光明は無量の世界を照す」とある。<sup>32)</sup> この光明が蓮華と結合したものに華手經があり、「一々の華の葉より千の光明を出し、遍く十方を照す」蓮華の光明は常に世界を照す<sup>33)</sup>と述べ、金光明經卷一には「蓮華上には四如来あり、東方を阿閼と名づく、南方を実相と名づけ、西方を無量寿と名づく、北方を微妙なる声と名づける。これ四如来は自然にして師子座の上に坐し、大光明を放つ」と説かれている。<sup>34)</sup> 又、光明の功用としての暗を破すことについて入楞伽經に「大慧よ、譬えば法仏、報仏は諸の光明を放ち、応化仏あつて諸の世間を照す如し、く光明の法体、世間の有無邪見を照除す」とある。<sup>35)</sup> 華嚴經卷三〇には「一切の

諸仏悉く最勝にして無上の光明・莊嚴がある。皆悉く遍く大光明を放ち、悉く無数の妙なる光明網がある。もって眷属のために普く十方諸仏世界を照す<sup>③④</sup>」<sup>③⑤</sup>といひ「一切の諸仏、皆悉く無量常妙光明あつて普く十方一切世界を照す<sup>③⑥</sup>」とある。

如来藏經における光明は經典構成上、重要な立場をもつもので、それらを見ると次の通りである。

「世尊は食事の後に栴檀重閣に入り給うた。その時、仏力によって、その重閣より百千万億の蓮華の花を出し、その大きさは車輪の如くである。妙なる色を具えており、その百千万億の蓮華が満開になつて虚空に上昇して全ての仏国土を覆ふこと、あたかも宝幔の如くである。各々の蓮華の胎内 garbha には如来身が結跏趺坐して住し、十方に普く光明 *rod na* を放っている。又、その時、仏威神力によつて満開の全ての蓮華の花弁が色あせ、汚れ、惡臭を放つ萎縮した状態となり、厭惡すべきものとなつた。しかし蓮華の胎内の如来身は結跏趺坐して住し、普く十方に光明を放ち輝いている。如来身がこれら蓮華の胎内に住することによつて、一切の仏国土は莊嚴され、それがために仏国土は美しくなつた。蓮華の胎内には如来身が結跏趺坐して住し、十方に光明を放つて輝いているのは如何なる因と縁によるか。」<sup>③⑦</sup>とある。如来藏經はこの神變をモチーフとして説き出され、それへの疑問として金剛慧菩薩の問い、世尊の回答となつてゐる個所である。

このような蓮華開敷の譬喩や光明所照国土の用例は他の經典にもみられるところであつて、前者の譬喩は雜寶藏經等にみられ、その思想は遡つてマハーバータの天地開闢説に至るとされている。<sup>③⑧</sup>後者にあつては、その枚挙にいとまがない程多く、その最たるものは淨土教經典と華嚴系の經典群である。今その一・二をみてみるに觀無量寿經には

「一々の光明は遍く十方の世界を照らして念仏の衆生を攝取して捨て給はず」<sup>③⑨</sup>

とあり、又、無量寿経には

「かの無量光如来応供、正等覺者は、自らの手の掌より光明 *pradha* を放ち、百千億、百万の仏国土を大光明によって照らした。…中略…仏国土においては一尋の光明…百万の光明…」<sup>27)</sup>

とあって、それらの例は多くみられる。又、無量寿経にあっては、仏の五智を説くところに、蓮華化生し、蓮華中に結跏趺坐して出現する旨を説いており、如来蔵経と共通する点を指摘することができる。

そして、その神変の後に第一喩が始まり、九喩を説いた後に、常放光明王如来の本生説話に入るのである。

「金剛慧よ、昔、過去の時、甚だ無量なる不可思議、不可比、不可説なる無數劫の彼方、更に彼方の時に、如来、応供、正等覺、明行足、善逝、世間解、調御丈夫、無上士、天人師、仏世尊は常に光明を放つと称する世間に生じた。金剛慧よ。何故にかの如来は常放光明と名づけられるかというに、金剛慧よ、世尊如来は常に光明を放つから、菩薩の時に人の胎に入るや否や、その胎内に坐し、身より光を生じて東方の百千世界、十仏国の微塵等を遍く照らしたのである。…中略…そして、かの菩薩の身の光明は歓喜を生じ、清浄であり甚深の歓喜を作し、歓喜を生ずることによって百千世界を遍く照らすのである。」<sup>28)</sup>

とあって、次に、光明の功德を述べ、如来蔵経の受持を説いて結びとしている。

次に如来蔵経中にみられる菩薩名で、光明に関するものを列挙すれば次の通りである。月光菩薩、宝月光菩薩、満月光菩薩、無辺光菩薩、放光菩薩、離垢光菩薩、功德光菩薩、普照光菩薩の八名であり、先の常放光明王如来は無量光仏に相應する性格のものと考えられ、光明の仏業として、智慧と一体の慈悲的活動を示唆している。

このように如来蔵経における光明思想の占める位置は大きく、同時に浄土教と深い関係にあることも知られるのである。

## (一) 究竟一乘宝性論における光明の用例

次に究竟一乘宝性論における光明についてであるが、その方法として、漢字訳において光明と訳出されるところの原語をさぐりあてその個所の光明の意義を追求してみたい。

光明<sup>④</sup>に相応する原語は一般的には *ābhā prabhā teja, jyotis, racmi, avabhāsa, kirana, āloka*, 等であるが、究竟一乘宝性論において使用されていないものは *teja* ならびに *jyotis* の二種である。以下各々の代表的な使用例を整理すれば次のようになる。

(A) *prabhāsvara, ābha, prabhā, avabhāsa* ㄅㄣㄅㄣ

*prabhāsvara* (*pra + √bhās + vara*) は如来藏思想形成における心性本淨説の聖教量とされる相応部經典にみられるものであって、先述の如く、原始經典における用法としては、多くが光り輝くの意味で用いられ、ブラフマンの威徳の記述や仏陀とブラフマンの比較の上で仏の功徳が殊勝であることを示す場合などに用いられ、清浄と漢字訳されることはごく稀れなようである。しかし、部派・大乘般若に入ると多く清浄の訳語が与えられるようである。<sup>④</sup>宝性論においては光明と清浄の訳が与えられていて一定の基準に基づく区分はない。

自性清浄心の源語は *prakṛti-prabhāsvara-cittam* ㄅㄣㄅㄣの *prakṛti-viçuddhi, prakṛti-praçuddha* ㄅㄣㄅ、清浄を示す語としては *nidhyāpana, prabhāsvara, vimukti, viçuddhi, vyāvādana, çuddhi, pariçuddhi* ㄅㄣㄅ、光明と清浄が混同して使用されているのは *prabhāsvara* のみである。

教化品の仏宝讃嘆の個所には

「如来は大光明 *prabhā* を放って諸菩薩摩訶薩に太子法王位の職を授く云々」<sup>④</sup>



とあり、如来蔵品では

「無分別の慧はよく煩惱を破し、光明照と相応す。智によるが故に一切種を知り、一切事を照し光明 *prabhāsvara* を放つ。この二によるが故に自性清浄心解脱は垢なく、垢を離れるは光明の輪の清浄と対応する」<sup>④③</sup>

「諸仏の身を証せざれば涅槃は得べからず。光明を棄捨して日を見ることがうべからざるが如し。仏を得なければ涅槃を得ない。光明と光線 *prabhā-rāśmi* を捨てては太陽をみるできないように」<sup>④④</sup>

とあって *prabhā* と *rāśmi* が共に使われていることもある。又、如来功德品には仏の三十二相を光明と色彩と形状の三に分類して「三十二の功德は法身によって開示されたものである。摩尼宝は光明（十力）と色彩（四無畏）と形状（十八不共法）の如くに、自性によって無差別である」<sup>④⑤</sup>

或いは、太陽の光よりも仏の光輪がより勝ることについて

「一切の国土と虚空面を光照する力は太陽にはない。又、無知の闇によって覆障された所知の境を照破しない。しかし、大悲を性とする仏日は種々の顯色を放射する。光蘊によって照らし、世間に対して所知の境を顯示する」<sup>④⑥</sup>とあり、光明の特性を述べている。

僧宝品には

「無垢とは煩惱障を離れるをもつての故なり。清浄とは所知障を離れるをもつての故なり。光明 *prabhāsvara* とは自性清浄の体と知る」<sup>④⑦</sup>

とあって、清浄と無垢と光明の一体を説き、不増不減經にも同様の説示がみられるのである。又、善浄時の不変異を説く中にも

「如来性は仏地における時は無垢 *atyanta-vimala* 清浄 *viśuddha* 光明 *prabhāsvara* にして常住自性清浄」<sup>④⑧</sup>

なることを明らかにしている。

又、法宝品には

「無垢の智慧の光明と輝き *jñāna-avabhāsa* を具し一切の所縁において貧瞋癡を対治する、かの正法の太陽に帰命し奉る」<sup>④</sup>

と説いて智慧と光明の関係を述べ、その光明は普く諸の世間を照すのである。その他、仏界を清浄にする六十種の功德の中に菩薩の八種の光明を説き、菩薩の光明 (*avabhāsa*) については如来蔵經にも説かれるところである。

以上によって知られることは、(一) 光明の日輪よりも殊勝であること。(二) 光明の体は智慧であって清浄とシノニムであること。(三) 仏功德・仏業として欠くべからざる性格のもの、などが知られ、光照所照国土の思想も顕著である。

#### (B) *rasmi kirana, aloka* ㄣㄣㄣㄣ

究竟一乘宝性論に引用する華嚴系經典の中、如来莊嚴智慧光明入一切仏境界經の智慧光明は引用個所によれば、*jñāna-āloka* である。如来蔵品相応の条には

「無垢界における神通と智慧と無垢とは真如と差別がないから、灯火の光と *dīpalokaśāra* 熱と色とに相似する」<sup>⑤</sup>とあり、無垢清浄光明 *āloka-vicuddhi* に用いられ

「煩惱は本より無体にして真性は本より明浄 *āloka-vicuddhi* なり」<sup>⑥</sup>

とある。又、仏業品七十九偈には

「経を引くことから生ずる智慧の、この広大な光明 *āloka* によって莊嚴された智慧を具足する菩薩は速に一切の仏境界に悟入するであるう。」<sup>⑦</sup>

と述べられている。

仏用品に太陽の喩を用いて、一切の正法の光明 *saddharma-kiraṇair* によって照らすといい、如来が大光明を放つこと *buddha-racny-abhiśekair* を示し、その光明による衆生の利益は

「衆生の身中に皆、如来の日輪あり、光照して *raśmi* 彼の衆生に利益を為す」<sup>⑤④</sup>

とあって、仏業と光明の関係が述べられ、性起品、入一切仏境界経を引用している。菩提品には仏は光明の輝き *raśmi* を具有し、<sup>⑤⑤</sup> 智光により衆生を照し *jñāna-raśmibhiḥ*、その如来の正法の光明は所化の衆生に対して無分別に活動し智慧の光明 *jñāna-raśmibhiḥ* は遍満するのである。

宝性論における光明の主なものとは *prabhā* と *raśmi* と *āloka* であって、各々の区別はないようである。

次に無量寿経をはじめとする浄土教経典における光明の特徴をみてみると次のようになる。

仏の光明が無比であることについて、無量寿経に

「智力かぎりなく、たとえるものなき、無量光よ *amitaprabha*、いかなる光もここに輝きを失い *anyaprabha* 太陽・珠寶・山の王なるスメール月の光 *candra-ābhā*、一切世間に輝く *bhāṣisu* ことはないであろう」<sup>⑤⑥</sup>

といい、第十三願では

「わたくしの仏国土において、光 *prabhā* が量の限られたものであったなら云々」<sup>⑤⑦</sup>  
とあり、所照国土については

「主よ、広大にして無比、無辺なる光 *vipula-prabhā* は四方八方のあらゆる仏国土を照し、あらゆる貧困と憎悪と迷いとを鎮め、地獄の火を消すであらう」<sup>⑤⑧</sup>

と述べ、光明の破煩惱の性格がみられ、光明の無比なることが強調され

「月と太陽の光も天空に輝かず、珠寶の群も火の光も、神々の光も、清い過去の行を實踐して、人間の王の光はあ

らゆる光に打ち勝つ」<sup>⑤</sup>

とされるのである。

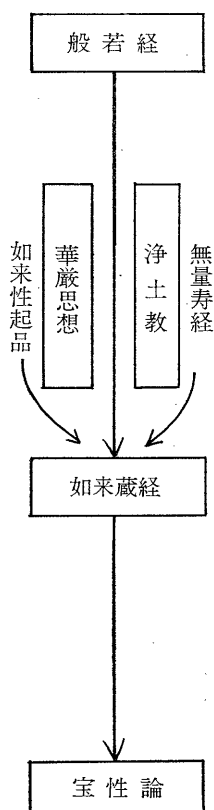
そして無量光の異名としては無量光明、無量光照、無辺光、無執着光、無礙光、常流出光、珠宝の光明、無礙光明王光、歓喜光、愛情光、統一光、満足光、不可制止光、不可思議光、無比光、三有王光、日月殊勝光、自在光とあり、或いは無量光仏以下超日月光仏の十二光仏など、光明の性格をよくあらわしている。この光明の功德には際限がなく、無垢であり廣大であって、楽を生ぜしめ、心に歓喜を生じ、全てのものに喜悅や歓喜や楽を作り出し、他の無辺際な諸仏国土において、よい心を持った生ける者の賢と善と正しい知識と巧みさと覺りと歓喜とを作り出すはたらきをもっているのである。無量寿平等覺經卷一に「無量清淨仏の光明は諸仏の光明中の王なり」最も極めて尊く」云々とあつて阿弥陀仏の光明の殊に勝れる様を述べ、大阿弥陀經卷上には「光明の普く照し輝き」<sup>⑥</sup>とあり、又、光明独勝分第十二には、その如く阿弥陀仏の光明の殊更に勝れることが述べられている。こうした光明の性格は無量寿經卷上に「無量寿仏の威神光明は最尊第一にして諸仏の光明の及ぶこと能わざるところなり」<sup>⑦</sup>といわれるものである。この勝れた光明は極楽の莊嚴にも用いられ、「一々の宝華に百千億の葉あり、その華の光明無量種の色あり、青色には青光、白色には白光あり、玄黄朱紫の光色も又然り、皦皦煥爛にして明曜なる日月の如し、一の華の中より三十六百千億の光を出す」<sup>⑧</sup>とされ、觀無量寿經には「如意珠王より金色微妙の光明を湧出す、その光化して百宝色の鳥となる。和鳥哀雅にして常に念仏念法念僧を讃う。」<sup>⑨</sup>ことが述べられているのである。そして光明の功用としては無量寿經卷上に「衆生あつてこの光にあう者は三垢消滅し、身意柔軟に歓喜躍動して善心を生ず、若し三塗勤苦の処に在つてこの光明を見れば、皆休息を得て復た苦惱なし、寿終つて後、皆解脱を蒙る云々」<sup>⑩</sup>とある。これが最もよくその特性を示している。

以上、光明所照国土、無量無比の光明、光明の功德などが述べられ、その特徴は如来蔵説にみられる光明の特徴とよく類似しているといえる。或いは、類似というよりも同じところからのものであると云った方がよいかも知れない。いつれにしろ光明思想は如来蔵説にあっても浄土教にあっても重要な概念であることに相違ない。

### (三) む す び

如来蔵経と無量寿経とは光明以外にも傾向を同じくするものがあり、細部にわたって類似するものをあげることができる。浄土教経典と如来蔵経論との関連については既に二・三の論文によって述べられている通りであり又、如来蔵経は華嚴経とも密接な関係をもっている。光明についてみれば、華嚴経系では多く *raśmi* が用いられ、浄土教系では *ābha, prabhā* が多く使用されているようである。究竟一乘宝性論の用例を見る限りでは華嚴系も浄土系いずれも用いられ何らの区分もなく、どちらかといえば両者と深いつながりを持ちながら二系統に介在する思想的立場をもっているといえるのである。性起品の影響を多分に受けている如来蔵経は先にみた如く無量寿経とも思想的には深くつながっていることが把握される。

従って、こうしたことよりして、如来蔵思想の成立史的立場もこの両者との関連の上で追求されなければならない。以上のことを図式化してみると



のように表記することができるであらう。

註① 最近の研究動向を系統的に分類したものととしては、水谷幸正「浄土教における如来蔵思想の研究」仏教論叢十五号所収がある。又、細部にわたっての紹介は高崎直道著『如来蔵思想の形成』中、研究文献目録参照。

② 芳村修基「仏教社会の思想的基盤—宝性論の場合—」印仏研一五〇二、一二四〇七頁、香川孝雄「如来蔵經典の成立について」印仏研四〇一、一九六〇九頁、等があるが、文化史的考察そのものというものはみられないようである。

③ 大正・二八・六九七b「心性清淨爲客塵染、凡夫未聞故不能如実知見、亦無修心、聖人聞故、如実知見亦有修心、心性清淨、離客塵垢、凡夫未聞故、不能如実知見亦無修心、聖人聞故、能如実知見亦有修心」

④ A. N. 1-5. 6. vol. 1. p. 10~.

⑤ André Bareau: des origines du Cariputrāhidharma-sāstra, Muséon, t. LXII, 1~2 Louvain, 1950. p. 69~95.

水野弘元「舍利弗阿毘曇論について」金倉印度学仏教学論集 一〇九〜一二四頁。Mathura 博物館蔵(No. 2879)弥勒菩薩坐像台座銘文。K. D. Bajpai, 'A new Inscription Image of maitreya from Mathura, proceedings Indian Historical Congress, 11th. Session (1948) 1951, 1995. 静谷目録(No. 665). J. M. Rosenfield, The Dynastic Arts of the Kushans, 1967, p. 229. がそのトターラを中心とする法蔵部の勢力と弥勒信仰を考えなければならぬ。印仏研二二一 静谷正雄、「法蔵部の碑銘について」p. 87~92. 参照引用。勝鬘經の無明住地煩惱の部派背景をも追求したものに、香川孝雄「勝鬘經における煩惱説の成立」恵谷記念『浄土教の思想と文化』一〇四五〜一〇六六頁。又、央掘魔羅經、六卷泥洹經には九分教、無識本涅槃經には十二分教、如来蔵經には有部の五道論、或いは又、塔婆經の中心とする法蔵部の立場などが考慮される。

⑥ 高崎直道著『如来蔵思想の形成』五七〜八頁。

⑦ Nasik, Inscription: No. 2-5.

⑧ 漢蔵三訳対照如来蔵経解題参照、仏教文化研究所(以下仏研本とする)

⑨ 山口益著『般若思想史』八六〜七頁、高崎直道「如来蔵と縁起—宝性論を手がかりとして—」印仏研二二一、二四四〜七頁。

⑩ 大正・九・六二四a、大正・一〇・二七二c〜二七三a・六〇七c、又、無上依經大正・一六・四七〇aにもみられる。

⑪ 成道十年説については伽耶山頂經(大正・一四卷)と関連され、未成仏の四菩薩は、不泥洹の四大阿羅漢の大乗的転化であって、弥勒の出世まで仏法を護持せんがために仏命によりて此世に残されたものであるとする。国訳一切經、經集部六・八九・九八頁脚注参照。

⑫ 成道後十二年という記述は増一阿含卷四四・大正・二・七八七・bにある。又、成仏何と説くものには僧祇律大正・二二・三三八・a、

二五三・b、二五七・c、二六二・aがある。未来仏・過去仏の思想も十分考慮されるべきであって、特に弥勒は注意されるべきであり、転輪王との関係も留意すべきである。

- ⑬ 香川孝雄「藏文如来藏経訳註」註⑥仏教大学研究紀要四一号、三七～八頁参照。

- ⑭ 日藏以下虚空藏菩薩は、大集経を想起せしめるが、あえて考えるならば現在の大集経中、最古層に属するものと般若経との関連が、如来藏経成立時の思想文化圏の中で把握されるのではないか。弥勒については、赤沼智善『仏教経典史論』香川孝雄「弥勒と阿逸多」印仏研一二～二・一五八頁以下、同「弥勒思想の展開」仏教大学研究紀要四四・四五合巻号二二五頁以下参照、松本文三郎「弥勒浄土論」、渡辺照宏『愛と平和の象徴、弥勒経』、H. E. Lamotte; *Histoire du Bouddhisme Indien*, Louvain, 1958, pp. 775～788.

- ⑮ 大唐西域記「中国古典文学体系二」一四四～一四七頁参照。又、法顯伝大正・五一・八五九・c～

- ⑯ Jataka, IV, p. 42～, A. N. I, p. 247～8, M. N. III, p. 243, II, p. 166, D. N. I, p. 115, A. N. I, p. 247, D. N. II, p. 96, A. N. II, p. 16, 中阿含五七、大正・一・七八五、雜阿含四七、大正・二・三四二等多くみることが出来る。

- ⑰ 中村瑞隆「阿含経典の Jata-rūpa 論について」印仏研一一～一二・二六～九頁。

- カウティリヤ実利論二・二二・三九 Cambridge History of India, vol I, pp. 進歩してゐる旨を述べてゐる。 には古くから金の加工がされていて、その技術は

- ⑱ Rapson; *Indian Coins*, pp. 17～8.

- ⑲ The Loeb classical library II, pp. 416～ には金の輸入について述べ、Nasik; *Inscription No. 13* にはウサバタータ王がカルシ掘院に寄進したことを伝えている。又、インドは鉱産物、特に金は豊富であつて、西域記等にはマトウラを始め、多くの地に産出する旨を述べ、興味深いことに、アショーカ王法勅は金の産出地には必ずといってよい程建立されていることである。如来藏思想を大乘仏教運動、教団形成の上から考察する時、先の三喻などよりして Garbha を従来の「胎」の理解の他に部屋、寝室、内陣などの意味のあることに注意してみたい。従つて当時、仏身論の発達の上から仏像崇拜が塔崇拜と関連しあひながら榮えていたのではないかと、とも考えられる。

- ⑳ 大唐西域記・中国古典文学大系二二・一四四頁。

- ㉑ Ibid. 一四九～一五四頁。

- ㉒ 香川孝雄「如来藏経典の成立について」印仏研4～1一九九頁には、一、ヤムナー河流域と、二、ナルパダ河沿岸を有力な地域として假定している。又、如来藏思想形成における思想文化圏としては今後、弥勒、転輪王、などの問題が追求されなければならないであろう。

如来藏思想形成における一・二について

- ②③ D. N. II. Kevatta-Suttanta, 80. vol 1. p 220.
- ②④ D. N. 19. vol II. p 220. 長阿含卷五、大正・一・一一〇・a。  
その他にも S. N. I. p 1~66, A. N. II. p 47, D. N. II. p 209, D. N. II. p 225~6. 雜阿含卷四九、大正・二・三六一・c、別  
訳雜阿含卷一五、大正・二・四八〇・a 等にみられる。
- ②⑤ S. N. p. 15. 4. 雜阿含卷四九・三六〇 b、別訳雜阿含卷十五・大正二・四七八・c、又、大智度論卷七・大正・二五・一二二~三参照。
- ②⑥ 勝鬘經、大正・一二・二二三・a。
- ②⑦ 大正・十二・二四〇・a。
- ②⑧ 大正・一六・一四六・b。
- ②⑨ 大正・一六・三三六・a。
- ③⑩ 大正・一六・五二五・b。
- ③⑪ 大正・九・三九三・b。
- ③⑫ 大正・九・三九三・b。
- ③⑬ 仏研本、九~一三頁。
- ③⑭ 大正・四・五二九・b。
- ③⑮ 香川孝雄「藏文如来藏經訳註」註⑧参照、仏教大学研究紀要第四一号所収。

以上略註（紙数の関係により略）